

## 追悼桐谷圭治先生. 生涯権威を信ぜず

保科 英人<sup>1)</sup>

### I. 桐谷圭治先生逝く

令和2年2月2日未明, 応用昆虫学分野で多大な功績を残された桐谷圭治が逝去された(死去月日は京都大学昆虫生態学研究室HPより引用). 桐谷先生は昭和4年生まれ. 御年齢だけ言えば往生を遂げられたわけだが, その死が惜しまれることは言うに及ばず. まずは心より御冥福をお祈り申し上げる.

桐谷先生の名前を知ったのは四半世紀近く前の大学3回生の頃. 当時愛媛大学理学部生物学科の学生だった筆者は, トンボ好きが転じて昆虫学を本格的に学びたいと決意した. 同じ愛媛大学で, 昆虫学研究室を持つ農学部へ転学部も制度上可能だったと思う. しかし, 「それは面倒だ」と感じ, 大人しく理学部を卒業した後, 農学研究科のある大学院に進学すればよいと考えた. もちろん, 理学部のカリキュラムには農学関連の授業はない. 一応, 故宮武睦夫農学部教授の昆虫学の授業を履修はしたものの, 大学院入試に備えて, 農学関連分野はほぼ独学で勉強せねばならぬとの覚悟を固めた.

筆者はまず片っ端に昆虫学関連の専門書を読み漁った. そして, その過程で, 何かの書籍で深谷昌次・桐谷圭治編著『総合防除』(講談社, 1973年)が引用されているのを知り, 桐谷先生の名が初めて筆者の頭に刻み込まれたのである. 筆者はすぐに大学生協の本屋で『総合防除』を注文したが, 時を置かずして「絶版」との回答が返ってきた. インターネットの古書通販なんぞなかった当時, 科学書に特化した古本屋がない地方都市では, 絶版や品切れとなった専門古書の入手はまず不可能であった. 幸い, 愛媛大学農学部付属の図書館に『総合防除』の所蔵があり, 複数回借りだしては必死に読んだ記憶がある.

昆虫学の世界に本格的に足を踏み入れる前の段階で, 桐谷先生の名前を知った筆者ではあるが, 無事九州大学大学院農学研究科に進学して以降, 先生の専門分野に重なる研究なんぞしたことはなく, したがって先生の論文を引用したこともない. おそらく, つい15行ほど前に記した『総合防除』が, 先生の著作の初めての引用のはずである. では, そんな筆者がなぜ先生の追悼文を書

くのか, いや, そもそも書く資格はあるのか. 筆者と先生との接点はただ一つ. 保科(2018)で言及した, 筆者が独自に行っている「大東亜戦争を経験した世代からの戦争体験のヒヤリング」である. 幸い昆虫学界の長老の先生方の御協力を得て, ヒヤリング自体はポツポツと進んでいるが, その内容の紹介はいつも追悼文との形をとっているのが口惜しいところだ(保科, 2017, 2019a, 2019b). 本稿もまた追悼文であるが, 先生が筆者に語り残した戦争体験を記したいと思う.

### II. “エエとこの子”の桐谷先生

筆者が桐谷先生の元へヒヤリングに訪れたのは, 平成28年6月28日. 奥様が体調を崩されているとのことで, 先生とお会いしたのは御自宅ではなく, 東海道新幹線熱海駅近くのマクドナルドである. 桐谷先生は「僕は記憶力が悪いから自伝は絶対に書かない, 書きたくない」とのことだったが, 筆者のヒヤリングに備えて, 昭和38年までのご自身の経歴をメモにしてくださっていた. 以下, 先生作成のメモと, 筆者とのやり取りの間で得られた回答をもとに, 先生の半生を書き記してみる. もちろん, 先生からすれば半世紀以上も前のことを書き出したわけだから, 年代等に記憶違いが含まれている可能性はある. その点はご了承願いたい.

桐谷先生は昭和4年1月1日, 大阪市南区高津町に生まれた. 桐谷家は貴金属と宝石を扱う古物商で, 貴族院議員の選挙権を持つほどの資産を持っていた. 先生は俗な言い方をするなら, 金持ちのボンボン, 関西弁で言うならエエとこの子である.

ここで簡単に貴族院議員の選出法について説明しておこう. 貴族院議員は選出法によって, 次の5つに分けられる. まずは皇族議員(ただし天皇は除く)と華族議員(公爵, 侯爵, 伯爵, 子爵, 男爵)で, この2つの議員は家柄による区分である. 次は勅撰議員で, 官僚や県知事, 衆議院議員を長く務めたものから任命される終身議員である. 昆虫学の世界で言うと, 幕末に「虫捕御用」に任ぜられ, 我が国で最初に公務として昆虫採集をした田中芳男(1838-1915)はこの勅撰議員である(保

<sup>1)</sup> Hideto HOSHINA 福井大学教育学部

科, 2016). 4 番目は帝国学士院会員から選ばれる議員で, 当代一流の学者たちがこの区分で貴族院議員となった. 田中館愛橘(1856-1952)や長岡半太郎(1865-1950)らがこれに該当する. 最後が多額納税者議員で, 明治 22 年の貴族院令によれば「各府県ニ於テ満三〇歳以上の男子ニシテ土地或ハ工業商業ニ付多額ノ直接国税ヲ納ムルモノ十五人ノ中ヨリ一人ヲ互選」とある(社団法人霞会館編, 1988). ざっくり言えば, 府県ごとに金持ちの上位 15 人を抽出し, その中から互選で 1 名の議員を選ぶ仕組みである. 大正 14 年の貴族院改革で投票資格を持つ有権者の人数は拡大されたが, 多額納税者議員の基本的な選抜法は敗戦まで維持された.

桐谷家はこの多額納税者議員の選挙権を持っていた. 当時の大大阪にあってもかなりの資産家であったことがわかる. ただ, 桐谷家の当主自身が貴族院議員に選ばれたことはない(衆議院・参議院編, 1990). 桐谷家には最も多い時で父母と兄弟 5 人の他, 経理担当者, 番頭, 使用人 2 人, 女中 3 人がいて, 計 14 人の大家族を構成していた. また, 住吉公園にあった桐谷家の邸宅は相当豪邸だったのであろう. 中国へ出征する兵士が多数家に泊まることもあった. 桐谷先生は研究チームを編成して成果をあげるオーガナイズを得意としたが, 長男として他人をうまく使う能力が自然に身につけていたからではないかと述懐する.

先生の父の会社は最初大阪市南区下寺町にあり, 後に松屋町に移った. 昭和 10 年, 先生は市立高津小学校に入学. 小学校へは南海電車とバスで通学した. 自宅も会社も学校も全て現在の大阪の中心市街地に位置していたわけである.

先生は小学校入学後もやっぱりお坊ちゃんだった. 「自分は不器用である」との理由で夏休みの図工の宿題は, 家の使用人か母親にやらせていた. 鉛筆を削る作業も中学校に入るまで自分ではできなかった. また, 小学校や中学校の教室に飾る生け花は母親が提供していたことから, 先生自身は「花」(=先生に鼻唄されているヤツ)と揶揄された. 金持ちの子弟が周囲からやっかみを受けるのは今も昔も変わりはない.

### III. “日本のフェアブル” 岩田久二雄に師事

昭和 16 年 4 月, 桐谷先生は府立高津中学に進学した. 先生はこの学び舎で当時高津中学の教諭だった“日本のフェアブル”こと岩田久二雄(のち神戸大学教授)の指導を受けることとなる. 先生は職員室に赴いて岩田に昆虫学の手ほどきを受けた. 昆虫採集用のガラス管を貰ったこともあった. 岩田からは「単に昆虫を採集し, 標本にするのは小学校で止める. 生きた虫を観察せよ」と教わった. さすがは日本のフェアブルである. とにかく標本の収集に熱を入れる現代の虫屋からすれば耳が痛いはずだ.

なお, 岩田は先生の学年の担当ではなく, 先生が岩田の授業を直接教室で受講したことはなかった.

岩田自身は昭和 17 年に海南島の木原生物学研究所に赴任し, 大阪を離れることとなる. 桐谷先生が岩田に師事した年数は決して長くないものの, 岩田との出会いが昆虫学者としての人生を決めたと述懐する. 高津中学で開かれた岩田の壮行会では全生徒が講堂に集められた. その時, 岩田が何を講演したかはよく覚えていないが, 「博士なんぞ大したことはない. 何事もコツコツやるのが大事だ」と話したことだけは印象に残っていると言う.

当時, 加藤正世の『趣味の昆虫採集』と, 平山修次郎の『原色千種昆虫図譜』がアマチュア昆虫家の脚光を浴びていた. 一方, 岩田はじめプロの学者連は北隆館の白黒ペン画の『日本昆蟲圖鑑』の方を愛用しており, 桐谷先生もあえて『日本昆蟲圖鑑』を買った. それだけでプロの学者になれた気分だった. 『日本昆蟲圖鑑』は道頓堀の古本屋で 5 円だったと言う. なお, 昭和 16 年の大工の日当が 4 円弱と言う時代なので(森永, 2008), 本来なら 10 代前半の子供が買える代物ではないはずだが, そこは先生が貴族院議員選挙の有権者の家の子弟たるどころか.

### IV. 大東亜戦争中の桐谷先生

桐谷先生が高津中学に入学した昭和 16 年 12 月 8 日, 日本海軍の機動部隊は真珠湾を奇襲, 日本は大東亜戦争に突入した. 先生は開戦日のことはよく覚えていないと言う. 初戦の華々しい大戦果はどこへやら, 日本陸海軍は次第に圧倒的物量で反攻するアメリカ軍に敗北を重ねていく. 戦局が悪化すると, 桐谷家は市民の供出した金属類を買い取る仕事も始めた.

敗戦が濃厚となる中, 大阪は散発的な空襲を食らうようになる. 戦争中と言えども, そこは中学生の子供だ. 友達同士で「どこそこで空襲があったぞ! 見に行くか!」みたいな野次馬根性もあった. 現代人の感覚で言えば, 人の家の火事を興味本位で見物に行くなんぞ不届き千万であるが, どうせ運悪く自分の家に爆弾が当たったら死ぬのは皆同じ, みたいな達観があったそうだ.

高津中学の生徒は軍事教練をやらされた. 先生も重い三十八式歩兵銃を担がされた. 戦争中, 軍事教練のために軍から中学に派遣されていた配属将校は全校生徒を集め, 予科練, 陸軍士官学校, 海軍兵学校などへの志願を盛んに煽った. 当時, 仮に昆虫を研究するために帝国大学に進学したとしても, 20 歳になれば徴兵されて戦死するだけとの覚悟を持たねばならなかった. そこで, 先生は「どうせ死ぬなら紺の詰襟, 腰に短剣の格好良い制服で戦死したい」との単純な思いで海軍を志した. 昭和 19 年の夏, 先生は舞鶴にあった海軍機関学校を受験した. 試験官の下士官がそれとなく正解を教えてくれた

こともあり（これはこれでどうなんだ？）、学科試験を無事突破した。その後、入校予定者として昭和20年2月まで勤労働員に参加、先生自身も飛行場の建設や機関車工場、砲兵工廠での労働に従事することになる。

いよいよ機関学校に入校すべく、先生は舞鶴に向かったが、最後の色覚検査で不合格となってしまった。他の受験生はほとんどが合格し、あこがれの軍服を貰えたのに、自分だけがトボトボと帰らされ、すごく気落ちした。両親が自分の不合格をどう評したかは記憶がない。不合格となった先生はやむなく、母校の高津中学の補修科に入り、次年度の受験に備えた。補修科在籍とは浪人のようなものであると言う。

昭和20年3月13日大阪大空襲。隣家のおばあさんや近所の紙問屋のご夫婦が焼死した。道路の真ん中にあった荷車に火がついて、あっと言う間に燃え尽きたことは今も鮮明に覚えているそうだ。この空襲で桐谷家も全焼した。父親は宝石商を止めざるを得なくなった。一家は母の実家に身を寄せた。大空襲時、家族は皆避難したが、先生だけは勇気を奮って、自宅地下壕に置いてあったトランクを取りに戻った。今から考えれば無謀としか言いようがないが、このトランクには宝石や腕時計などが入っており、桐谷家の以後の生活の貴重な支えになったと言う。筆者は先生に「戦争が長引き、食糧事情は悪くなる。空襲も激しくなる。お上に対する批判のようなものは生まれなかったのか？」と尋ねたが、「う～ん、当時は批判するとの概念がなかった」と答えられた。

昭和20年8月15日、大日本帝国は無条件降伏した。玉音放送をどこで聞いたかは記憶がないそうだ。当然、戦争に負けて悔しいとの思いがあったが、その反面、灯火管制がなくなったことはヤレヤレとホッとした。

軍国少年として教育されてきた桐谷先生にとって許せなかったのは、戦時中自分たちに散々「お国のために死ね」と煽ってきた大人たちの豹変であった。筆者が戦前生まれの方にヒヤリングをしていると、よく聞く話ではある。「まあ、戦後に態度をコロッと変えた学校の先生方も時代の被害者だったのだろう」と寛容に思われる方もいれば、「絶対に許さん」と憤られる方もいる。桐谷先生は後者だったわけである。桐谷先生が政府などの権威に対して原則不信感を抱くのは、戦中戦後で豹変した大人たちを見たことに根差しているそうだ。そのせいもあってか、先生は生前選挙権を得て以降、共産党以外には投票しなかったと言う。

#### V. 「研究成果で多くの農民の力となれ」

桐谷先生は、終戦後大阪に引き上げてきた岩田久二雄と再会した。岩田は帰国直後、寺に下宿していて、先生は丸山工作や上野俊一と共に岩田を訪ねたこともあった。その後、岩田は北野中学に着任する。先生は池田市

にあった岩田の自宅を訪ね、ミノムシのバター焼きを御馳走になったこともある。ミノムシはエビの味がして美味だったそうだ。

先生は昭和21年3月、三重高等農林専門学校と姫路高校を受験するも、両方とも不合格。そこで奮起して勉強し直し、翌22年同じ両校を受験し、今度は共に合格した。先生は姫路高校に進学し、さらに京都大学農林生物学科昆虫学教室に進学するため、一層勉学に励んだ。姫路高校ではクラスの2割が共産党の支持者だったと言う。警察が先生の家の中にドカドカと入って来て、本棚の本をチェックしたこともあった。また、大阪中之島のメーデーに参加した時は、機動隊と衝突したらしいが、華奢な先生はごっつい機動隊員に簡単に吹き飛ばされてしまった。

昭和25年、先生は京都大学に入学し、結核による1年の休学と大学院在学期間を経て、昭和34年8月大学院博士課程を中退した。桐谷家は戦争中の大阪大空襲で家業を失い、経済的に苦しくなっていた。戦前は貴族院議員になれる資格があったほどの富裕層の子息の先生であるが、大学中に結核を患った時は治療費すら捻出できず、医療保護を受けざるを得なかった。もっとも、先生からすれば、家業を継ぐ義務から解放されたので、それはそれで良かったのではないかと回想する。

昭和35年3月、先生は和歌山県農業試験場朝来試験地の主任となり、サンカメイガやミナミアオカメムシの研究に取り組んだ。その後、先生は亡くなるまで応用昆虫学分野で多大な業績を積み重ねられていくわけだが、それは土壌性甲虫の分類屋の筆者が紹介すべきことではあるまい。直系の弟子の方々に任せすることにしよう。

「共産党以外に投票したことがない」と公言される桐谷先生であるから、当然先生の政治思想は左だ。対照的に筆者は相当右寄りなわけだが、先生と熱海でお会いした平成28年6月末と言え、参議院選挙の真っ只中である。筆者はとにかく政治の話にならないように慎重に話題を選んだ。

学生運動の引き金となった日米新安保条約が調印されたのは昭和35年1月であるから、幸か不幸か、既に京大を離れていた先生は大学内の安保闘争を経験しなかったことになる。一方、先生の京大の後輩にあたる故井上民二は60年代、相当過激に安保闘争に加わっていた。ある時、井上が先生の試験場に遊びに来た。先生は井上に「君が学生運動に熱心で、象牙の塔にこもることを馬鹿にしすぎるのはいかなものか。君は労働者の味方として、農家の田んぼの田植えを手伝うことはできるだろう。しかし、君たちが本当にやるべきことは、もっと勉強して、その知識や研究で農家に貢献することだ！」と叱責したそうだ。井上は桐谷先生の説教を受け入れた



ように見えた。もっとも、先生曰く「あいつがホンマに本心から納得したかどうかは知らん」とのこと。

最後に徹頭徹尾権威への反骨を失わなかった先生のエピソードを紹介して、筆を置くこととしたい。先生は高知県農業技術研究所時代に、BHCの使用禁止を推進した。国がBHCを全面使用禁止にする前の話である。高知県と言えども、条例で正式に禁止しているわけではないから、先生は「買わない、売らない、作らない」を標語に使用自粛を求めた。幸い県経済連や農協も賛同してくれたが、たばこ栽培農家からは理解が得られなかった。そして、たばこ農家側から圧力がかったからであろうか、ある時先生は県庁に呼び出され、「始末書を書け」と強要された。先生は自分は悪いことはしていないと確信していたので、始末書を書くことを絶対拒否した。すると、県庁の役人は「始末書が嫌なら顛末書を書け」と軟化したように見えたので、「顛末書なら経緯を記すだけだからいいだろう」と了承した。その後、行政の世界では、顛末書と始末書は似たようなものであることを知り、「海千山千の県庁の連中に一杯食わされた」と先生は地団太を踏んだようだ。

#### IX. 参考文献

- 保科英人, 2016. 帝国議会における元虫捕御用の田中芳男. *Biostory*, 25: 92-100.
- 保科英人, 2017. 追悼伊藤修四郎先生. 高千穂宣麿最後の知己. *きべりはむし*, 39 (2): 53-57.
- 保科英人, 2018. 明治 150 周年. 新時代の土壌性甲虫の楽しみ方. *月刊むし*, (568): 2-9.
- 保科英人, 2019a. 追悼黒子浩先生. 「高千穂採集標本」をめぐる謎. *きべりはむし*, 41 (2): 41-49.
- 保科英人, 2019b. 追悼黒佐和義先生. 來期ノ櫻觀ル事能ハス. *さやばね*, (33): 60-67.
- 森永卓郎監修, 2008. 物価の文化史事典. 展望社. 477 pp.
- 社団法人霞会館編, 1988. 貴族院と華族. 霞会館. 743 pp.
- 衆議院・参議院編, 1990. 議会制度百年史. 貴族院・参議院議員名鑑. 衆議院・参議院. 481 pp.